

珍海の三輪説について

王 奇

1. はじめに

三輪説は『華嚴經』と『法華經』の平等性を強調するため、五時四宗に対する批判として二藏義と共に中国三論宗の教判思想として吉蔵において確立された。仏が初めて成仏した時、高位の菩薩のために『華嚴經』を説いた。これを根本法輪という。しかし、機根が鈍い人はこの教えを理解できなかったため、仏は一仏乗を三乗に分けて法を説いた。これを枝末法輪という。四十余年の三乗の教化によって衆生に大乘の機根が熟したことを見据えて、仏は『法華經』を説いた。これを摂末歸本法輪という¹⁾。このように、吉蔵は仏一代の教説を三つの段階に分け、それぞれ根本法輪、枝末法輪、摂末歸本法輪としたのである。

しかしながら、日本平安末期の珍海（1091-1152）の時代に至ると、三論宗の思想的な様態は微妙に変化して、珍海においては吉蔵と同じく仏説を声聞藏と菩薩藏に分けたものの、三輪説については吉蔵と相違があり、これを傍論であると判じている。この点については、珍海の著作『三論玄疏文義要』（以下『文義要』と略す）の中に見られる²⁾。その中では珍海は『法華經』の信解品を挙げて、三輪説は全ての義を包摂できないという質問について、『中論』を科段して三輪説を解釈する。三輪説は『法華經』一部に限らず、仏一代に関係するが、彼はそれを正意でなく傍論であると判釈した。そして、その傍論という視点は『大品般若經』に対して従来の三論宗思想と異なる理解に関わるものだと考えられる。本論文は珍海の解釈する三輪説をめぐる、彼の『大品般若經』に対する理解について考察してみたい。

2. 『中論』を科段して三輪説を解釈する

珍海は三転法輪を適用して『中論』を三段に分けて明かしている。このような解釈は珍海自身の観点ではなく、吉蔵の三論宗思想の継承である。吉蔵は『中観

論疏³⁾の中で『中論』を科段して、二十五品までは一乗の根本の教えであり、二十六品と二十七品は枝末の教えであるとする。後の大乘の教え、つまり撰末帰本の教えは二十七品の末にある「一切法空故、世間常等見、何處於何時、誰起是諸見⁴⁾」という偈頌であるとする⁵⁾。このように、『中論』の義は大乘及び小乗を含め、全ての邪見を排除することができるとする。吉蔵は『中論』を科段して三転法輪で解釈することから、三輪説は三論宗教判にとって重要な意味を持っていることが知られる。

一方、吉蔵の三輪説に対して、珍海は『文義要』の中に吉蔵の『大乘玄論』巻五の教述義を挙げて、吉蔵の教判には三輪の義はないとし、三転法輪という教判は正意ではなく、正しい教判は二蔵にあると述べる⁶⁾。珍海の立場からみれば、三論宗の教判の正義は二蔵にあり、三転法輪にはないのである。理由は『大品』等についての異なる理解に関わると考えられる。なぜなら、珍海は『文義要』において、『大品』『浄名』等の教えは根本でもなく、枝末でもない。それらは大乘の教法であり、正しく菩薩を教える教法ではないかと指摘した⁷⁾。この指摘から知られるように、珍海にとって通論である『中論』をもって三輪説を解釈するものの、教判において三転法輪に正意はなく、傍論であるとの立場を取っていた。

3. 三輪説において『大品般若経』を位置付ける

二蔵説に正しい教判があり、三輪説はそうでないとする珍海が、教判に関して微妙に吉蔵と相違する背景を考えると、『大品般若経』に対する珍海の理解は見逃せない。彼は自身の著作『大乘正観略私記』（以下『略私記』と略す）の立宗本教の段において、三論宗の所依經典を論じる中で、

一者、論初標八不。八不雖散出諸經、而正舉二經。謂環珞經佛母品、涅槃經師子吼品文也。故知、正申涅槃環珞二經部也。

二者、以般若爲宗。故八不義云、故相傳云、中論是釋論骨髓也。四論云、玄義文亦同之。智論既解般若一部。故知、此論正解般若。

三者、一切大乘以爲論宗、此論既是大乘通論。以花首經三是之偈、顯一部大乘。又釋涅槃悉有佛性。十二門論初明六義大乘、通冠諸部⁸⁾。

と述べる。一の八不は諸大乘經に散見されるが、ここではとくに『涅槃經』及び『環珞經』を指すと解説される。二の般若は『大品』を指し、珍海は、『中論』が釈論の骨髓であるのに対して、『大智度論』を『般若』一部を解説する論書と位置づける。そして、『般若』を三論の根本にして宗帰であるとする。二の文末及

び三の初めにいう「此論」は『中論』を指し、その『中論』は、『般若』のみならず、『花首経』⁹⁾『涅槃経』をも含む大乘の通論であるとした。

珍海のこのような考え方は、吉蔵が『法華玄論』巻三¹⁰⁾の中で、『大品』と『法華経』の深淺優劣を会通するところにもよると推測される。吉蔵の意図は、菩薩蔵と声聞蔵という二蔵説をもとに、『大品』と『法華経』の両経を含むすべての大乘經典は顕道において異なる所がないとしていることである。「顕道無異」という立場から、当時よく広く知られていた五時四宗の教判論を批判し、二蔵義・三輪説を基礎とする自らの教判を提示するところにあった。

これに対して珍海は、すでに見たように、『中論』は釈論の骨髓であり、大乘の通論と理解した上で、『大品』をもって『大智度論』を含む広義の三論宗の根本にして終極の經典と位置づけた。

また珍海は、『文義要』の中で、ともに根本とされる『華嚴経』と『法華経』をあえて二つに分け、『般若経』を枝末法輪に位置づけることに対して、教相の上で大・小乗のみを分ける立場に立ち、『般若経』を大乘としてのみ位置づけ、三輪説は判教の通説ではないと結論したのである¹¹⁾。

4. おわりに

以上のように珍海においては、声聞蔵・菩薩蔵の二蔵説こそ三論宗の教判としての正意であり、大乘と小乗の二面を考えて、『大品』を大乘のみに属せしめる意向が見られ、『華嚴経』と『法華経』を除く諸大乘経を枝末法輪に帰結させることは濫用であると指摘して、三輪説は傍論であると結論したのである。

1) T34, 634c17-23.

2) T70, 202b9-14.

3) T42, 8b29-c4.

4) T30, 39b13-14.

5) T42, 169a1-21.

6) T70, 202a15-16.

7) T70, 209a9-12.

8) T70, 197a29-b14.

9) 論文中に引用された『略私記』の引文には「花首経」とあるが、『花首経』と言う經典は調査したが見つからなかった。しかし、珍海は『文義要』の中で『花首経』「三是之偈」について以下のように解釈している。即ち「花首経第三，佛說偈云，是心及衆縁，皆空無自性。若人如是知，終不退菩提。若法性自空，是法即無生。一切無生法，是名眞智種。今案，是心及衆縁，皆空無自性者，衆因縁生法。我說即是空也。若法自性空，是法即無生等者，亦是中道義也。衆因縁性法者，是世諦。我說即是空者，眞諦。此眞俗二

諦，并是假名。若人如是知，終不退菩提者，是假名有故，空有并名假也。亦爲是假名也。即無生故，亦即是中道也。無生者中道也。故八不初云，不生且舉一句耳」と（T70, 248a27-b9）『花首經』とは『仏説華手經』のことで，珍海が音通で「手」を「首」と書いた可能性があると推測する。

10) T34, 384c19-386a23.

11) T70, 209b14-20.

〈参考文献〉

平井俊栄 1976 『中国般若思想史研究——吉蔵と三論学派——』 春秋社。

奥野光賢 2002 『仏性思想の展開吉蔵を中心とした『法華論』受容史——』 大蔵出版。

藤井淳 2011 「中国における教判の形成と展開」 桂紹隆他編 『大乘仏教とは何か』 シリーズ 大乘仏教 1, 春秋社, 221-251.

高野淳一 2011 『中国中観思想論』 大蔵出版。

〈キーワード〉 珍海, 三論宗, 三輪説, 大品, 傍論

（国際仏教学大学院大学博士課程）

新刊紹介

福田洋一 著

ツオンカパ中観思想の研究

A5版・382頁・本体価格 7,000 円
大東出版社・2018 年 2 月